



障害をもつ幼児の保育(16)

—この子と出会ったとき—

津守

真 (M)

津守

房江 (F)

見ること その三—メガネ・鏡

子どもにとって関わりの深い『見るための道具』とい

えば「メガネ」とか「鏡」がすぐ思い出されます。メガ

ネは対象をよく見るためのもの、鏡は自分を見るためのものと考えられますが、保育の中ではどのような意味があるのでしょうか。

子どもとメガネ

F うちの孫はメガネにとっても興味を示しますが、障害のある子たちもそれは共通のことだと思っております。

M そう、どの子もメガネに興味を持ちますね。

興味を持ち方は時により人によって違いますが、メガ

ネに対する関心には何か神秘的なものすら感じさせられます。始めはメガネは顔についている物として興味を持つのでしたが、それから次第に『お父さんのメガネ』『おばあちゃんのメガネ』というようにその人と結び付いて捉えられるようになりますね。

F 『保育者の地平』（ミネルヴァ書房）にあなたが書いているN君の話も亡くなったお父さんがメガネをかけていたことに結び付いていましたね。あの話をしてください。

M N君のお父さんが亡くなった後、しばらくN君は私の机の上からメガネをとって若い男の先生にかけさせて、ときには一日中持っていることもありました。お父さんはメガネをかけていましたから、若い人を見るとお父さんのように見えるのかと思いました。ある日私は午後から講演に出かけなければならぬとき、Nくんは私のメガネをどうしても放しませんでした。ほかの人のと取り替えてもらおうとしたら、その子がめつたに出さない大きな声を出して抵抗したのです。私の黒い縁のメガ

ネでなければ承知しないので、困っていると、一人の職員が「メガネをかけなければ話せないようなことは、話す必要はないでしょう」と言いました。私ははつとしました。私は講演に行くのにメガネがないと困ると思いついでいたのです。

でもじきに、N君はそのメガネでなければこの時の気持ちが表示出来なかったことに私は気がついて、メガネを持たないで講演に行きました。それで何も困ったことは起こりませんでした。

F その時から長い年月がたつて見ると、N君のそのときの思いの深さがよく分かりますね。おとなは、聞き分けがないとか、わがままと考えがちですが、あの子なりの亡くなったお父さんに対する追悼の気持ちだと思えますね。

メガネをめぐるトラブル

F 私は途中からメガネをかけ始めたので、親しい子どもたちの興味をひいたのでしょうか、何人かの子どもにも

メガネを飛ばされた経験があります。

自分がメガネを取られて困ったので、お母さんたちが愛育に来るまでの乗り物の中で子どもがよその人のメガネを突然取ってしまったて、驚かれたり、怒られたりしてとても困った話をするのがよく分かるようになります。

M 子どもにとっては、メガネというのは、目を代表するものだから、目に敵意を感じると、メガネに飛びかかって取るのではないかな。

F そういえば、電車の中では、大きな声を出すと他人から睨まれたり、変な子だと思われたりすることが多いですね。

M だから、その人の目に対して攻撃的になるのですよ。

F そうね。その子をめぐってトラブルが大きくなると、その子に対する非難の目が大きくなりますね。それにメガネって高価だし、私のように乱視や遠視や老眼がはいっているとすぐには作り替えられません。一緒にい

る親が本気で焦ってしまう気持ちはよく分かります。

M 朝、登校して来たとき、電車の中でこんな事件があったと泣いて来る若いお母さんもいます。そんなとき、先輩の母親たちがいろいろ慰めたり、アドバイスしています。

F そうそう、私もそれに教えられたり感心したりしました。

M まずは相手の人にこの子の気持ちを説明しながら謝る。子どもの側に立つことのないチャンスだと考えるのですね。

突差のことも、この子を皆に理解してもらおうというも思っていると出来るのでしょうか。お母さんたちは実に立派だと思いますよ。

F メガネはその人に属するものだと言うことを知っているのに、わざと取って相手をからかうということもありますね。私もからかわれたと思います。笑いながらるのですから。

S 子さんは町でよくメガネをめぐってトラブルを起こ

しましたが、メガネをとると相手が本気で怒ったり、困ったりする。それが面白かったみたい。おとなの仮面をはぎ取るといったら考え過ぎかしら。

M 私は普段はメガネをかけていないけれど、子どもに本を読むときはかけます。

F 子どもが取ったりしませんか。

M それはしょっちゅうだけど、メガネを壊されたことは一度もありません。私はすぐ渡してあげるから別にもめることはないなあ。

メガネを突然取られたら知らない人は誰だつてびつくりしますよ。

F メガネは子どもを見る目の暖かさや、厳しさを強調することにもなるから、子どもにとってつらい思いの象徴のようになるのでしょね。

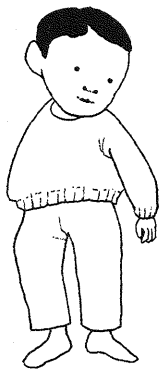
メガネの魔力

M メガネに飛びかかって取ってしまう子どもは、そのメガネをかけている人にも敵意を感じているのではない

かとさつき言いました。メガネとその人とが一緒になつて、その人の目がこわいのか、メガネがこわいのか分からなくなるほど、メガネの光が異様に輝いて見えるのではないかと私は思うのです。

F 光線の具合でメガネがキラリと光るように思えることがありますね。

M 『保育者の地平』の第4章3に書いたことですが、ベッテルハイムのメガネの考察に私がハッとさせられたことがあります。それは、しばらく休暇をとっていた実習生に、ひとりの女の子が「先生、今日は新しいメガネをかけている」と言ったのです。その実習生はメガネを新しくしたわけではなかったのです。「新しいメガネをかけていませんよ」と答えたのです。それに対して、



ベッテルハイムは、その女の子にとってはそれは新しいメガネと感ぜられたに違いないのに、実習生はそれを否定したことを厳しく批判しました。メガネが新しいのではなくて、女の子自身が新しくなったので新しいメガネのように見えたのだと言っています。

F なんだかややこしい話だけど、よく考えるとそういうことは普通にありそうですね。

M そうなんです。見る人が変化すると、同じ物が違って見えるのです。新しいメガネと言ったのは、以前には恐ろしかった母親の目かもはや恐ろしくなくなったので、実習生のメガネも新しくなったように見えたのです。

F メガネとそれをかけている人とが分離したのですね。それで異様に光ったように見えたメガネが魔力を失った。

M その通りです。メガネがただの物になったのです。そうしたら飛びかかってメガネを取る必要がなくなりました。

鏡を見るのが好きな子

F 話を鏡に移しましょう。

M 鏡を見るのはどの子も好きですね。鏡を見ると、子どもは自分とその背景とを見えています。鏡に映る姿によつて自分が外からも見ることで存在だということとで、いつそう自分というものが確かになるのでしょうか。

F あまり泣かない子が鏡の前で「笑いましょ ワツハツハ…… 泣きましょ エンエンエン……」の音楽に合わせて泣きまねをしたり、笑ったりしている姿は心に残っています。感情を表出するのが下手な子が、鏡の前で練習しているように見えました。

M 私も子どもが泣いたり笑ったりして、自分の思いを表現して、それが鏡に映るのを見ておるときに、この子は大事なことを学んでいるのだと思つて見えています。

F 本当はうるさいなあと思つこともあるけれど（笑い）思い直してこんなに表現出来るのは自分の存在に自

信がある証拠と、襟を正すのです。

鏡の中に自分とその背景を見る、といわれましたが背景も含めて見ることが大切なのでしょうか。

M そう、自分だけを見るときはナルシスチックに自分に陶醉していることがあります。極端に自分の姿だけにこだわるのではなく、自分をとりまく人や風景の中で自分を見る。

F 鏡を見ることは自我の成長には欠かせないことでしょう。他人を含めた中で自分を見るときという。

M 一歳八か月のうちの孫が鏡の中にジージの顔が映っているのを見て、笑いました。自分も映っているし、他人も一緒に映っている。それはだいたいな発見ではないでしょうか。

優しい目について

F 愛育養護学校での出来事です。一人の女の子が水たまりに映った空を大声を上げて見ているうちに、だんだん近寄って行って自分の姿が映っていたのを発見しま

した。そのときの喜び、感動は子どもの持っている大事な資質だと思います。「センス オブ ワンダ」と言ってもいいでしょう。私にはこれが将来どんなことに結びつくのか分かりませんが、子どもが大きな自然に包まれる感覚、存在の基礎となることではないかと思います。訓練してできることではありませんね。

M 子どもから学ぶのはそういうことだと思いますね。

F あるお母さんがトイレにいくときいつも後をつけて来る子に、抱きしめて「だーいすき」と言っていたら、その子が一番初めにいった言葉が「だーいすき」だった。その話を聞いたとき、抱き締められながら子どもはお母さんのほつぺたを両手ではさんで、お母さんの目の中に写った自分や回りのことを見ていたと思うのです。

M お母さんの目の中に自分が映っているなんて、いろんな子どもと母親の話の中にでて来るけれど、とてもすてきな鏡だと思う。